京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（３年計画の１年目）

1. 研究課題

インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に

Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image: Focusing around the Development Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views

2. 研究代表者氏名

手嶋英貴

Teshima　Hideki

3. 研究期間

2022 年 4 月-2025 年 3 月(1 年目)

4. 研究目的

紀元前一千年紀以来、インドでは「人間などの生命体が生と死を繰り返す」あるいは「世界が発生と消滅を繰り返す」といった循環的イメージに基づく存在理解の方法が発展してきた。とくにインドの「人間観」を代表するものとして、業の理論と結びついた輪廻説がつとに知られ、またインドの「世界観」を代表するものとして世界の反復的な生滅を説くユガ説が有名である。そして、これに類する存在理解の方法は、ヒンドゥー教や仏教の伝播によって、日本を含むアジアの多くの国や地域に大きな文化的・社会的影響を及ぼした。そうしたインド的思想の基礎には、存在の様態を「循環的なイメージ」で捉えようとする共通の思考がみられる。しかし従来の学界では人間観と世界観とを個別に研究することが多く、それらの相互関係に目を向けることが少なかった。本研究はこの共通的思考を「循環的存在論」と名づけてその発生・展開のプロセスを明らかにし、かつ南アジア、東アジア、および東南アジアで共有される社会的・文化的基盤について、新たな視野を開こうとするものである。

Since　the first millennium BCE, Indian people have developed viewpoints for understanding how the world and living things exist, especially involving a cyclic image, such as viewpoints that "the world repeats its emersion and destruction forever" or that "all living things are in a continual cycle of birth and death."　From those, they have yielded the methodology of "reincarnation" based upon the notion of karmic retribution, as well as that　of "cosmological cycle of four Yugas" apparently inspired by periodicity of the natural world. The former is the representative methodology regarding living (including human) beings, and the latter concerning the world which encompasses the lives. Cognate thoughts about the way of existence were spread to many Asian countries/regions by dissemination of Buddhism and

Hinduism which functioned as conveyors of Indian thoughts, and, subsequently, culture and society of each countries/regions including Japan were deeply influenced by them. The "cyclic image" upon which the thoughts in question are commonly based, however, has been paid little attention by scholars, because of the tendency that they explore both the methodologies, of existence of living things and that of the world, separately.　In this research project, we attempt to clarify what was the process of emersion and evolution of the "Indian ontology in the cyclic image," in which both the types of methodology are meaningfully integrated and related to each other. This research will provide fresh insights into the socio-cultural basis common among South, East, and Southeast Asian countries/regions.

5. 本年度の研究実施状況

年度内に２回の班員ミーティング、９回の定例研究会、および１回の公開シンポジウムを開催した。定例研究会は、前半を「テクスト輪読」、後半を「研究報告」の二部で構成された。前半の部では『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』第２章（新月満月祭）の３分の１程度まで読み進めた。班員が輪番制で和訳を提示し、そこから得られる知見を共有していった。後半の部では、とりわけ「循環的世界観」の形成過程の解明につながる研究報告を、班員および招聘講師が順に行った。研究会における成果の一部は、約 100 名が参加したシンポジウム「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」（令和 5 年 2 月 21 日開催）で広く公表された。研究会、シンポジウムは、基本的に対面とオンライン双方で参加可能なハイブリッド形式で行われた。また集会の様子を録画し、後に YouTube で公開した（限定公開）。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-20 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に１　ヴィシュヌ信仰形成の諸相：初期のクリシュナとヴィシュヌの図像をめぐって 発表者 大木舞 京都大学大学院・日本学術振興会 本研究班の趣旨および研究計画等について 司会 手嶋英貴 龍谷大学

2022-06-17 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に２ 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.1.17-28」（新月満月祭本祭日儀礼） 発表者 尾園絢一 広島大学大学院 The ritual practice of animal sacrifice in pre-islamicate Zoroastrianism: Comparing Old Iranian and Old Indic sources 発表者 Elia Joël Weber　Freie Universitaet Berlin

2022-07-15 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に３ 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.1.29-37」（新月満月祭本祭日儀礼） 発表者 尾園絢一 広島大学大学院 「スダナとマノーハラー」物語と「クシャとスダルシャナー」物語 発表者 中村史 小樽商科大学

2022-09-30 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中

心に 4 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.1.38-2.4.2.5」(新月満月祭本祭日儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 「śamyā についての一仮説」,「パーシュパタ派の灰をめぐって」 発表者 高島淳 東京外国語大学
2022-10-01 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に 5 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.1.38-2.4.2.5(つづき)」(新月満月祭本祭日儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 『シヴァダルモッタラ』におけるプラーナ宇宙誌のシヴァ教的改変 発表者 横地優子 京都大学大学院
2022-11-18 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に 6 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.2.6-32」(新月満月祭本祭日・祭壇作り儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 『シヴァダルモーッタラ』第 7 章の研究:シヴァ教における地獄観とその位置づけ 発表者 髙橋健二 東京大学大学院
2023-01-20 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に 7 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra2.4.2.6-32」(新月満月祭の祭壇作りに関するブラーフマナ文献記述) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 新月満月祭の祭壇作りに関するシュルバスートラの記述 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
2023-02-17 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に 8 古代後期の一神教伝統における循環論:歴史的分析と比較考察 発表者 山城貢司 東京大学先端科学技術研究センター 祖霊祭の儀軌とマントラにみる祖霊観と命の循環経路 発表者 虫賀幹華 京都大学大学院・日本学術振興会
2023-02-21 公開シンポジウム「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」 導入解説 司会 手嶋英貴 龍谷大学 ヴィシュヌ信仰形成の諸相:初期のクリシュナとヴィシュヌの図像をめぐって 発表者 大木舞 京都大学大学院・日本学術振興会 祖霊祭の儀軌とマントラにみる祖霊観と命の循環 発表者 虫賀幹華 京都大学大学院・日本学術振興会 シヴァ教における地獄観:『シヴァダルモーッタラ』第 7 章の研究 発表者 髙橋健二 東京大学大学院 古代後期の一神教伝統における循環論:歴史的分析と比較考察 発表者 山城貢司 東京大学先端科学技術研究センター 指定討論 1 コメンテーター 澤井義次 天理大学 指定討論 2 コメンテーター 横地優子 京都大学大学院
2023-03-17 インドにおける「循環的存在論」の形成――祭祀思想から哲学への発展を中心に 9 「Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.2.6-32」(新月満月祭本祭日・祭壇作り儀礼関連ブラーフマナ文献・つづき) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 喉音による韻律復元に基づく『リグ・ヴェーダ』の詩人家系の特徴け 発表者 塚越柚季 東京大学大学院博士課程

7. 共同研究会に関連した公表実績
公開シンポジウム:ブラフマニズムとヒンドゥイズムー南アジアの宗教と社会の連続性と非連続性 第 9 回シンポジウム「 インド宗教文化における『循環』の思想と表象 」(令和 5 年 2 月 21 日、京都大学人文科学研究所大会議室). 参加人数 約 100 人

8. 研究班員

所内

稲葉穣

学内

天野恭子(京都大学白眉センター)、横地優子（京都大学大学院文学研究科)、井狩彌介（京都大学)、藤井正人(京都大学)

学外

手嶋英貴(龍谷大学法学部)、高島淳(東京外国語大学)、中村史(小樽商科大学商学部)、梶原三恵子(東京大学大学院人文社会系研究科)、堂山英次郎(大阪大学大学院文学研究科)、西村直子(東北大学大学院文学研究科)、川村悠人(広島大学大学院人間社会科学研究科)、菊谷竜太(高野山大学文学部)、尾園絢一(東京大学大学院人文社会系研究科)、近藤隼人(筑波大学人文社会系)、大島智靖(東京大学死生学・応用倫理センター)、矢野道雄(京都産業大学)、井田克征(中央大学総合政策学部)、眞鍋智裕(北海道大学大学院文学研究院)、伊澤敦子(国際仏教学大学院大学附属図書館)、虫賀幹華(日本学術振興会 PD)、髙橋健二(日本学術振興会 PD)、吉水清孝(財団法人東洋文庫)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属		1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
（内女性）		(0)					(0)				
京大内（人文研を除く）		4	0	0	0	0	20	0	0	0	0
（内女性）		(2)					(14)				
国立大学		10	0	2	0	0	34	0	6	0	0
（内女性）		(3)		(0)			(16)		(0)		
公立大学		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）											
私立大学		5	0	0	0	0	26	0	0	0	0
（内女性）		(1)					(10)				
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）											
独立行政法人等公的研究機関		2	0	1	1	0	16	0	8	8	0
（内女性）		(1)		(1)	(0)		(8)		(0)	(0)	
民間機関		1	0	0	0	0	8	0	0	0	0
（内女性）		(0)					(0)				
外国機関		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）											
その他 ※											
（内女性）											
計	0	23	0	3	1	0	105	0	14	8	0
		(7)	(0)	(1)	(0)	(0)	(48)	(0)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名（必須）	掲載論文数（必須）	掲載年月日（必須）	論文名（必須）	発表者名（必須）
1	日本佛教學会年報 86	1	R4.8	後期アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派における「衆生」観――救済の有資格者に関して	眞鍋智裕
2	印度学仏教学研究 71-3	1	R5.3	On Avihita Bhakti	MANABE, Tomohiro
3	印度学仏教学研究 71-2	1	R5.3	インド古典文学の異類婚姻・異郷訪問ーー「クシャとスダルシャナー」物語の場合ーー	中村史

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画
年度内に 10 回の定例研究会（4 月～2 月）と 1 回の公開シンポジウムを開催する。各回を、前半「テクスト輪読」と後半「研究報告」の二部で構成する。前半の部では『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』第 2 章（新月満月祭）テクストについて班員が輪番制で和訳を提示し、そこから得られる知見を共有していく。後半の研究報告では、とりわけ「循環的世界観」の形成過程の解明につながる研究報告を、班員が順に行っていく。ちなみに、定例研究会における研究報告は、「公開シンポジウム」（毎年 1 回開催）での登壇に向けた「予行プレゼン」として位置づけられる。これにより、報告者は他の班員から得たコメントや、会での議論を足掛かりとして、シンポジウムでの発表をより高度なものとしていく。研究会、シンポジウムはすべて対面とオンライン双方で参加可能なハイブリッド形式で行う。集会の様子は録画し、後に YouTube で公開する（限定公開）。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	140	450,000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				
消耗品等経費				
その他	（シンポジウム広報ポスター、フライヤー印刷費、郵送費）			200,000
合計				650000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等
定例研究会の成果を広く告知するために、公開シンポジウムを開催する。また、令和 4 年度に定例研究会、シンポジウムで蓄積された学術的知見をに基き、班員個々人が学術論文等の形で成果を公にする見込みである。